『碁太平記白石噺』第六「浅草の段」の異本二種(解題と翻刻)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学国語国文学研究室 公開日: 2021-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久堀, 裕朗 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20210330-001

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	『碁太平記白石噺』第六「浅草の段」の異本二種(解題と翻刻)
Author	久堀, 裕朗
Citation	文学史研究. 61 巻, p.45-56.
Issue Date	2021-03-30
ISSN	0389-9772
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学国語国文学研究室
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

（『文学史研究』61号　2021．3）

『碁太平記白石噺』第六「浅草の段」の異本二種（解題と翻刻）

久堀裕朗

安永九年（一七八〇）に江戸外記座で初演された浄瑠璃『碁太平記白石噺』（全十一段）[1]は、同年九月に大坂北堀江市の側芝居豊竹此吉座で五つの段が抜粋上演され、続いて翌十年（天明元年）春に同座で全段（十二段）[2]の通し上演が行われた。そして今日の文楽の伝承（特に第七の「新吉原」）[3]においては、大坂で改訂された本文が伝わっていることがよく知られている。本作の作者は江戸初演時の丸本に記載された「浄瑠璃作者連名」によって、珍しく合作の分担までわかっているが、執筆の中心となったのは紀上太郎（三井家の南家四代高業）と烏亭焉馬で、そのうち生粋の江戸っ子であった烏亭焉馬の執筆した第六（浅草）・第七（新吉原）が、江戸を舞台にした場面でもあり、当地の通言や風俗描写が多く、大坂の上演においては大きく書き替えられた段であった。

ただ大坂改訂本文は丸本としては刊行されず、いくつかの段が抜本として刊行されただけなので、全段についてその本文が確認できるわけではない。詳しくは後述するが、大坂初演時に刊行された六行抜本は、第四（田植）・第五（逆井村）・第七（新吉原）・同（掛合）・第八（碁）・同（屋舗）・第十一（紺屋口）・同（同切）であったと推定される。今回取り上げるチャリ場の第六（浅草）については、初演当時には抜本として刊行されず、十九世紀になってから五行抜本として刊行された。しかしその現存本は多くないと思われ、またこれまでの研究の中でもあまり触れられたことがない。かつその本文は初演本文とも、文楽現行本文とも異なるものである。そこで、本作の伝承について考える材料として、ここに紹介し、全文を翻刻することにした次第である。

また併せて、近世後期における淡路座の同段上演本文を紹介することにしたい。淡路座が使用した床本は、近代以降のものが多く残っているが、江戸時代の写本は少ない。その中でここに紹介する写本「碁太平記白石噺」は、天保期に作成された珍しい本で、第六だけでなく、当時淡路座における同作通し上演の本文を収録した本と推定されるものである。第七（現行の切場の部分）については大坂の抜本と同じ本文であるが、第六の本文は、江戸の原作、大坂の五行抜本、文楽現行本文とも異なっている。そこで、こちらも第六のみ翻刻して、参考のため併録することにしたい。

以下にそれぞれの本の情報を、【底本】【書誌】【内容】【成立・備考】に分けて詳述する。

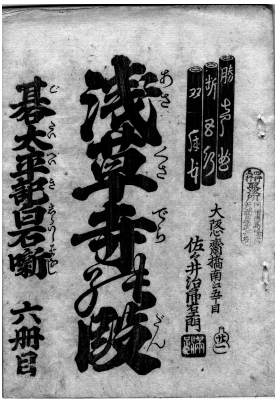
五行抜本「碁太平記白石噺 六冊目 浅草寺の段」

【底本】架蔵。

【書誌】五行抜本。半紙本全二十丁。版元「大阪心斎橋南江五丁目／佐々井治郎右エ門」。「浅草寺の段／碁太平記白石噺 六冊目」（前表紙）。内題「碁太平記白石噺 六つ目」。終丁丁付「白石六 廿一了」。

【内容】江戸の原作では大道芸人のどじょう（当時江戸に実在）が活躍するが、この抜本ではどじょうが登場せず、代わりに閣然という坊主を登場させる点に特徴がある。以下に梗概を記す。

浅草寺門前。参詣に来ていた吉原の妓楼大福屋の亭主惣六は、寺に用事があるため、連れていた幇間の五町と茶店前で別れる。五町が茶店で休んでいると、怪しげな坊主が通り、茶店の主人と争いになる。その坊主閣然と顔見知りであった五町は仲裁して争いをとどめ、閣然に相談したいことがあると言い、二人は茶店の内へ入る。



表紙

そこに、吉原で遊女になった姉を訪ねて奥州から出てきたおのぶが通りかかる。おのぶと参詣人とのやりとりを窺っていた女衒の観九郎が現れ、おのぶを騙して連れて行こうとするが、惣六が出てそれをとどめ、観九郎に五十両を渡しておのぶを助け、吉原に伴って帰る。

大金を得た観九郎が喜んでいると、茶店から五町が出てくるので木陰に隠れる。五町は通りかかった飛脚が「後醍醐天皇の御宸筆」を届けようとしているのを知ると、飛脚を殺して状箱を奪う。そこに男がやってきて五町に借金の返済を迫る。五町が困っているところに観九郎が出て、五町の持つ「御宸筆」を質物に取って五町に五十両を貸す。五町は死骸を担いでその場を立ち去る。観九郎は三百両の品を得たと喜ぶが、状箱の中を確かめると先月終わった富の札のみ。飛脚と金貸しは、実は五町の一味の男たちで、すべて観九郎を騙すための五町らの芝居であった。

またその間に閣然が寺の祠堂金百両を盗んでおり、観九郎は更に閣然に騙されてその罪まで着せられ、寺僧に追われて逃げていく。

【成立・備考】前述の通り、大坂初演時に第六の抜本は刊行されなかった。そのことは寛政七年版・文化三年再版『五行浄瑠璃外題目録』に段名がないことによって確認できる。同目録に収録される本作の六行抜本は「四冊目 田うへのだん」「五冊目 逆井むら」「七冊目 新よしはら」「七冊目切 かけ合」「八冊目口 碁の段」「八冊目切 屋舗の段」「九冊目 敵討のだん」「十一冊目 紺屋の段 口／切」であり、このうち六つの段の抜本（西宮新六・佐々井治郎右衛門版）[4]の現存が『義太夫年表 近世篇』[3]に指摘されている。指摘のない「四冊目」「七冊目切」「九冊目」もおそらく初演時に開版されていたであろう。同目録の文化三年版第二次改修本の「五行床本目録」にも六冊目は収録されていないことから、今回紹介する五行抜本「浅草寺の段」は、

同改修本刊行の上限である文化十二年（一八一五）十月以降の開版であることがわかる。[6]

一方、嘉永三年（一八五〇）版『四行五行浄瑠璃外題目録』には「五行床本目録」の「豊竹之部」に「同（白石噺）　六冊目　浅草ノ段」が載ることから、同五行抜本は遅くとも嘉永三年以前の開版である。また同目録版行時、佐々井の住所は「堂島中三丁目」（奥付）であったが、同五行抜本では「心斎橋南江五丁目」となっている。弘化三年（一八四六）九月以前刊行の再刊『碁太平記白石噺』では既に佐々井の住所が堂島に変わっているから、[7]抜本の開版はそれ以前ということになる。[8]以上を総合して、一応ここでは同五行抜本の開版を文化十二年以降、弘化三年以前（一八一五～一八四六）と推定しておく。

次に段名に着目すると、第六の段名は近世期においては「浅草」が普通で、「浅草寺」とするのは近代を通じても天保四年（一八三三）三月稲荷境内芝居興行（「浅草寺の段」「新よし原の段」の上演）の一度きりである。よってこの興行との関連を考えたいところだが、問題は番付の役名と一致しない点である。当該番付には「どじやう」の記載がある一方、五町や閣然は記載されていない。従ってこの興行との関連は、今のところ不明としておくしかない。

それからもう一つ付け加えておかなければならないのは、抜本開版時とは別に、この収録本文がいつ創作されたかということである。この抜本の開版は十九世紀に入ってからだが、この本文の成立はおそらくその時点ではないだろう。というのは閣然という坊主が登場するその内容は、大坂初演の絵尽と一致しているからである。当該絵尽[9]を参照すると、浅草の段の部分に「かくぜん五十両のかねをぬすみ貫九郎をたばかりとかをぬらんとたくむ」場面が描かれている。盗んだ金額（五十両か百両か）の違いはあるが、閣然が登場する点や、盗みの罪を観九郎に着せる点で五行抜本と一致している。従って、五行抜本は十九世紀になってから創作された本文ではなく、大坂初演本文を受け継いだものと解釈できるだろう。但し、本作の上演史を辿っても、番付に閣然の名は見当たらず、逆にどじょうの名の方が散見される。そこから考えると、実際の上演では、原作からどじょうが活躍する場面を適宜抜いてまとめた、現行文楽のような台本が優勢だったのではないかと推定される。実際にこの抜本の本文で上演された機会があるのか、なぜ十九世紀に入って初めて刊行されたのかなど不明な点が多いが、今後の検討課題としたい。

写本「碁太平記白石噺」より「第六　浅草の段」

【底本】南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館蔵〔片山家（喜）〇三一〕

【書誌】七行写本。半紙本全百二十丁。書題簽「碁太平記白石噺（姉は宮城野　妹はしのぶ）」。冒頭に「弐三番」二丁、「口上」一丁を収録。三丁表に内題「碁太平記白石噺」。最初の段（吉野内裏）に段名はなく、以下「第二　明神ノ森の段」「第三　石堂館の段」「第四　田植の段」「第五　逆井村の段」「第六　浅草の段」「第七　新吉原の段」「第八　屋舗の段」「第九　扇か谷の段」を収録。終丁裏に奥書「天保四巳十月吉日／淡州津名郡志筑浜村連堵田中屋（印）」。

【内容】大福屋惣六と五町のやりとりから始まり、以下原作を適宜簡略化した台本だが、どじょうが地蔵に化けるくだりを略している点が

五行抜本と同様である。最後に五町らに騙された観九郎が御宸筆の箱を開けると、富の札の他に「たばかり申一札の事」と書かれた証文が入っており、それを読むくだりがあるが、そこがこの本文の独自な点と言える。

【成立・備考】この写本は淡路座の一つ、志筑中田村の淡路源之丞座の座本の家に伝わった本である（寄贈者片山喜晴氏の祖父が淡路源之丞座最後の座本）。但し、近代に入ってから盛んに活動した淡路源之丞座（前身が志筑源之丞座・上野源左衛門座）の発祥については詳しくわからず、この写本が作成された天保四年（一八三三）にどのような状況であったのかはわからない。しかし天保十二年に津名郡に人形座があったことなども報告されており、[10] 天保期に中田村に人形座があったことは確かだと考えられる。

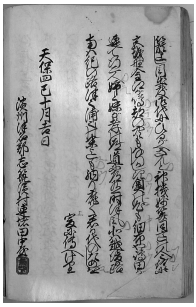
ただこの写本の奥書には「淡州津名郡志筑浜村連堵田中屋」と書かれており、志筑浜村は中田村の隣村、「連堵田中屋」は不詳なので、直接人形座関係者によって作成されたのかは不明である。しかしこの写本には書誌の項目に記したように、「式三番」と「口上」が収録されており、これは興行初日の冒頭に三番叟を奉納し、次に座本が口上が述べるという淡路座の上演形式に一致している。参考にその「口上」を挙げると、以下の通りである。

東西〳〵。高ふはこさり升れど是より一寸御断を申上ます。当国益御繁昌に付。立会興行被仰付被下升段。座本下手村恵全之丈義は。申上るに及ませす。大夫。沢竹新大夫。竹本勇大夫。同寿元大夫。豊竹与三大夫。同日野大夫。同万大夫。西谷茂大夫。沢竹田納大夫。三味線豊沢豊吉。柏沢伝三郎。島沢虎吉。勝沢勝之丈。其外惣座中如何計大慶に奉存升。扨御祝儀の式三番目出度相済。御慰に語升浄瑠理の外題。東西。とふおふ〳〵〳〵ざい。とふざい。増補碁太平記白石噺。今宵大序より五つ目逆井村大切迄相勤明晩早々六つ目より九つ目敵討迄。無幕に相勤御覧に入升る様に御ざり升。事始り升ッてもござりませうなら。隅から隅迄御神妙に御聞の程奉希升。弥増補碁太平記白石噺。大序始り。サア左様。

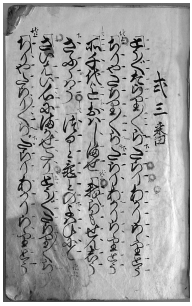
立会（たてがい）（素人が、ある一つの外題を通して語る会のことであろう）に雇われた形で口上が述べられているが、座本の「下手村恵全之丈」（「上村源之丞」などを意識したもじりか）はもちろん架空の名で、太夫・三味線も実在しないのかもしれず、戯文的なものと言ってよいだろう。しかし、口上の形式は徳島県立文書館酒井家文書に記録された淡路座の口上と一致しており、[11] 実際の淡路座の口上を模したものである。従って、この本に収録された浄瑠璃本文も、当時の淡路座の上演本文を反映したもの（そのものではなくても、その影響下にあるもの）と推定される。何よりここに紹介する第六の本文が、単に丸本・抜本を写したものではないことが、そのことを証明している。また右の口上で「増補碁太平記白石噺」を「五つ目」までの前半と、「六つ目」からの後半に分けて二晩で上演すると述べているが、淡路座では昼芝居に加えて「夜芝居」（よ）があったことが、文化八年（一八一一）刊の滑稽本『狂言田舎操』によって知られる。よってこうした内容も、実際の上演に倣ったものと解釈できよう。以上のことから、この天保四年写本は、当時の淡路座の『碁太平記白石噺』上演本文を反映した資料として極めて貴重なものと判断される。

表紙

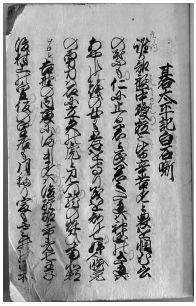
口上（3オ）



本文末尾（120ウ）



式三番（1オ）



本文冒頭（5オ）

注

（1）初演当初十一段揃っていなかった点については、神楽岡幼子氏「「碁太平記白石噺」の上演形態について―黄表紙を資料にして―」（『百舌鳥国文』第七号、一九八七年十月、後に『歌舞伎文化の享受と展開―観客と劇場の内外―』（八木書店）所収）や新編日本古典文学全集『浄瑠璃集』（小学館、二〇〇二年十月）の解説（大橋正叔氏執筆）など参照。

（2）大坂での上演では、第八（宇治上悦屋敷・扇が谷敵討）を二段に分けるので、全十二段となる。

（3）現行では「新吉原揚屋の段」とされるが、「揚屋」という段名の初出は文政十三年（一八三〇）大坂御霊境内芝居興行で、定着するのは明治半ば以降である。宮城野を抱えている大福屋（大黒屋）が舞台になるので、本来は揚屋ではない。

（4）佐々井の住所が「大坂長堀白髪橋北へ入」となっているものが初演当時のもの。例えば大阪市立中央図書館蔵「鶴澤清六遺文庫二四八」など。大阪市立図書館デジタルアーカイブで閲覧可能。なお佐々井の住所の変遷については神津武男氏『浄瑠璃本史研究』（八木書店、二〇〇九年二月）六七頁参照。

（5）『義太夫年表 近世篇』第一巻（八木書店、一九七九年十一月）五六八頁。

（6）『五行六行浄瑠理外題目録』の改修については、神津氏前掲書「江戸初演作品板木の移譲経過」に詳しい。同書二五九頁注（35）など参照。文化十二年十月は同目録の版元の一つ天満屋安兵衛の住所移

転時期。

（7）正確には奥付に「大坂　佐々井治郎右衛門版／同堂島新地中三町目　榎並屋久蔵版」と記されている。佐々井の住所が明示されていないが、この時点で榎並屋と並んで「堂島新地中三丁目」になっていた可能性が高いと思われる。

（8）再刊『碁太平記白石噺』の刊行や榎並屋久蔵の活動については、神津氏前掲書「最後の浄瑠璃板元・加島屋竹中清助」二八六頁注（6）参照。

（9）早稲田大学演劇博物館蔵〔ロ18-00014-02F〕など参照。同館近世芝居番付データベースで閲覧可能。

（10）『伝統芸能淡路人形浄瑠璃』（兵庫県三原郡三原町教育委員会、二〇〇一年三月）二〇二頁参照。

（11）拙稿「徳島県立文書館寄託「酒井家文書」の淡路座興行記録」（『演劇研究会会報』第四十一号、二〇一五年五月）参照。

【付記】写本「碁太平記白石噺」の翻刻、図版の掲載に当たっては、南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館に御高配を賜った。記して御礼申し上げます。なお本稿はJSPS科研費（課題番号19K00326）の研究成果の一部である。

翻刻凡例

それぞれ底本に忠実な翻刻を期したが、読解の便を考慮し、以下のような処置を施した。

一、各底本には段落がないが、曲節等を考慮して適宜改行した。

一、句読点は底本の通り、語りの息継ぎを示す句点のみ「。」を代用して記した。

一、漢字は原則として現在通行の字体に改めた。

一、反復記号は原則として底本の通りとした。但し平仮名は「ゝ」、片仮名は「丶」、漢字は「々」とした。

一、墨譜は省略したが、文字譜は底本の通り、本文中の適切と思われる位置に挿入した。なお「ウ」と「ヲ」は区別していない。

一、会話・独白・心内語に相当する部分を「　」で括った。

一、丁移りの箇所は本文中の（　）に実丁数で示した。

五行抜本「碁太平記白石噺　六冊目　浅草寺の段」

碁太平記白石噺　六つ目

地ハル尊（たつと）さは奥深（おくふか）きより浅草（あさくさ）の。ウ門ンから光（ひか）る中御（ナカミ）仏ケのキンヲクリ誓（ちか）ひの。糸に引ㄱれくる。ウ老若（らうにやく）ハル男女（なんにょ）打チむれに中フシ参詣（さんけい）たへ間なかりけり。

地色参り下向（げかう）の其中カに男付キなら（1オ）気立（きだ）テなら。人ト付キ合ィも吉（よし）

原に名も大福屋の中惣六が。ウ跡に付キ添牽頭の五町。ハルいこかはフシ来る茶店の前。

「詞イヤ申シ惣六様。何ンといかい参りじやござりませぬかい」。「さればいの天ンの気がよい故。夥しい人の出様。ヤ夫レはそふ（1ウ）とおりやちよつと塔中へ寄ラねばならぬ用が有ル程に。貴様は先キへいんでもらをかい」。「ハイ〳〵そんなら私シは勝手にお先キへ。早ふお帰りなされませ」。「成ル程後に」と地ウ惣六は。フシカヽリ寺内の方中へ跡見送クり。ウ五町はハル床几に（2オ）色腰打かけ。「詞何ンと御亭主闘しごんすか」。「ハイイヤモ目がまふ程闘しいでござります。小口はきつい砂ぼこり。もそつと奥へお這入リ」と。地ウ茶くむ火入レるてん〳〵とフシ廻ハる竈の蔑簀先キ。

地色ウやぶれ衣にハル古頭巾中ウノル経も。そこ（2ウ）爰ハル飛誦の。ウ顔も子細なはげ坊主。「ヨミ詞仏説あみだ経。如是我聞一時仏在。従是西方功徳荘厳」。「ア、コレ〳〵此闘しい茶店の先キ。手の隙がない通りや通ッてもらふ」。「だまれ。祖師御開山聖人。御化導の御利益にて（3オ）かりやす明樊のお座につらなり」。「ア、去リ迚は通らしやれ。の」「だまれ。だまつて居よ。ヱ八代目の善知識。膳に居つてのたまはく」。「ヱ、しつこい坊主じや通ッりやいの」。「ヤこいつが〳〵アノ推参慮外。不埒不届ふらすこ千ン（3ウ）万ンなやつの。何ンじや通ッりや。身は出家じやぞ。ヲヽ忝ナくも仏ケの体を得たる出ッ家をとらへて。通れなど、は何をぬかすうず虫めが」。「ハ、、、、イヤこりやゑらいたんな坊主の。何ンじや見りやあらめのやうな衣を（4オ）引ッぱり。あたちよこざいな呼バはり。ず応柄に頤おとがい あいたら擲きなやすぞよ」。「ヨ何ンじや此知識をわりや見事擲きなやすか」。「ヲヽ望ミなら此枴。ふるまふくらへ」と地ウやら腹ラ立チ。ハルたゝきかゝるを五色町は押サへて。「詞ア、コレ〳〵ありやおやつ（4ウ）じやはいの。相ィ手にならずとよしに〳〵。イヤコレ閣然おれじやはいの」。「ヤハア是は扨五丁様か。いつ間に」。「イヤさつきにからあそこに居たが。又しても〳〵よふ人とせり合ッわろじやはいの」。「ハテいはいざいの。譬衣はあらめで有ラふが。（5オ）するめで有ふが。出ッ家は出ッ家でござるはいの。夫レをあいつが」。「サ、、、よいはいの。夫レはそふとちと貴様に相談をしたい事がある程に。ちよつとアノ簾の内チへ」。「ハ、成ル程。何ニかはしらねど毎日門トへ参ィる手の内の旦那の頼ミ。イヤこ（5ウ）りや亭主。ソレ茶もたばこ盆も早ふ持ッてうせいよ」。「ア、コレ又そんな事いふて腹ラ立テすのか。サア〳〵こちへ」に地ウ押柄坊主。打チ連レ立ッて中入ル跡へ。ウ又もむら〳〵参詣人ン。茶やか床フシ几に休らふ所へ。

順礼歌深ッカき科今より後はよもあらじ。（6オ）「詞コレサ申シよ。問イたい事がござり申スよ。あのや。吉原で名の高い女郎さア何ンと云ィ申ス。知って居めさるならおしへてくんさいちやア」。「ハ、、、ヤこりやばつとした尋ね様ッ。コレ吉原で名の高ィい女郎と計リいふてはしれぬ。夫レはアノ何ニ屋の内チで名は何ン（6ウ）といふぞいの」。「ヱ、こな人はナ。其名を知リ申せばそれさアへ行キ申スはよ。なアでもおらが姉さアでござるはちや」。「ハテナアそんならマアいふてみよかい。ノウ佐兵」。「ヲヽ夫レ々。マア名の高ィいへばア斯つ。マア丁子屋で丁山か雛鶴。松葉やで松がへ。（7オ）或は又扇屋で花扇といふても分るまい。ハテ扨気の毒な尋ね者」。「イヤコレ夫レは爰らで尋ねふより。吉原へいての。おらが姉さア爰らにおらないかと。一軒〳〵尋ね

て廻るがいつちよかろ。見りや小みめよい娘の子。独旅じや（7ウ）そふないぢらしい。ア、不便ンや」と地ハル夕間ぐれキン鐘は中上野かハル浅草通り。フシ思ひ〳〵に別ヵれ行。

地色ウしゞうを後に肝煎観九郎。ハル猫撫声に「コレ〳〵姉爰へおじや〳〵。わがみやアノ姉を尋ネるのじやそふなが。其姉におれが逢ハして（8オ）やろか」。「ヱ、何ンといひめす。アノ姉さアになア」。「ヲ、逢してやる〳〵。ガ其吉原といふ所へ奉公に行ヵねばならぬが合点か」。「アイサ姉さアに逢ハれる事なら何しろつてもかまやせないさ」。「サ、、、、そこで其奉公するには。おれ（8ウ）を伯父じやと云ハねば出来ず。又姉にも逢ハれぬがよいか。ヲ、合点か〳〵。サ、、、そんならおれが今連レていてやろ。サア行きや〳〵」。「コレ観九待ちや」。「ホイ角町の親方。何ンぞ用でもごんすか」。「用所かい。観九わるいぞや〳〵」。（9オ）「ヤコレ親方。わるいとは何が。ヱ、れこが事かへ。コリヤおれが在所の姪。奥州からたつた今。どこへなとやつてくれといふておこした。アイ這出でごんす。ナア姪よ。コリヤ〳〵伯父じやぞ〳〵」。「アイサうん共は伯父さアの世話になり申シて。奉公に（9ウ）行キ申ズのさ。こがいな者でも置キめすなら。居るに頼む」と地ハル一ト筋にウ姉に逢ィたさ憂ふしのウつらき苦界に中しづむとは。フシしらぬ心ぞいぢらしき。

地色ウ惣六つれ〴〵おのふが顔。ハル打チ詠めて。「詞ムウすりや此娘は（10オ）貴様の姪で。奥州から今来たじや。ム、よし〳〵。何ンと観九此娘わしが買たい売てたも〳〵」。「アイイヤもふどこへなり共売ルしろ物。直段次第でやりましよかい」。「ム、スリヤ売ッてたもるか。ヱ、そんならがらり五十両。（10ウ）よもや不足にやありやしよまいがの」。「ハテよごんす。狂言の筋しつた親方。彼是いふてはやばぜんさく。夫レでは大きなまけなれど。エイハしよ事がないまけてもやれ」と。地ウ矢立テ取リ出し証文を。ウこて〳〵認めフシ手に渡タせば。（11オ）

「詞そんなら観九。ソレ五十両受取りや」。「ヲット有リがた山吹キの花ざかり。イヤコレ姪や。ソレ随分と奉公大事にしての。そしてのアノ、。地ハル毒な物くはぬ様にしてたもや。ウ雨風雪ふり夜更ては。上腹ラがいたいと作病おこし。中コレマ必ズ（ママ）ずしく（11ウ）ぢりハルちらかして。ウ伯父が名迄も。キン呼出すな。詞ハ、、、、ア、ほんにマア孝行な者でござるはよいやい。ヨホ、イホ、、、、ハ、、、、、」。「アイサ。伯父さアのいかいお世話。サ礼ィは緩りといひ申そに。近く（ママ）にござれさ。ヤコレ必ズ」と地ウ何ンのよしみも赤鬼の。ハル為に売ラれて（12オ）中行ク娘。ウ仏ヶ性なる惣六が胸に一チ物ハル二タ人連レフシ吉原さして立帰る。

地色ウ跡に観九は中五十両。キンあたまへ乗たりウほうべらを。ハル撫てほた〳〵おいとしぼ。「詞ム、ンム、、、、ハ、、、、ハア、こりやマア味い事が有ッたはやい。手も足シもなふ五十両。へ、、、、ハ、、、、。シヤ（12ウ）ほんにマア味い事ちや有ッたはやい。何ンでも是から盆屋へ出かけ。一ト銅取ッてざつく〳〵。地ウどりや趣かふ」といふ後へ。ウ出てくる五町ハル観九郎は。ちやつと木影へ中向カふより。ウ飛脚と見へてハルいつきせき。「詞コレ〳〵物が問たい。浅草の浪人ンの者はどこだの」。（13オ）「ハテめつそうな物の問ィ様フ。シテ〳〵其浪人ンの者には何ンの用じやへ」。「サレバ〳〵。其用といふ此状箱。此中ヵは忝くも後醍醐天皇様の御宸筆」。「ナニ其中ヵの物

が」。「ヲ、サ〳〵」。「ムウ」地ウと立チ寄リ引ッたくれば。「ウ是は」と驚く首筋を。ぐつと一ト（13ウ）しめハル七転八倒。ウ口に手を当テフシカ、リ死骸を片寄セ中状箱を。ウ懐中する間もハルあたりの中気づかひ。フシ闘しそふにくる男。

「詞ヤア五町爰にか。跡月ッ切リに借シた金ネ。元ン利共に五十両。今おこすかサ、どふじや〳〵。ムウ返ン事のないはおこ（14オ）さぬ気じやな。よいはどふでたゞは返すまい。代官所へ連レて行。サア立テうせふ」といふ後。「其金わしがかして進ンぜふ」。「ヤムウ終に見た事もないお人。金を借ふとは」。「サア何ニやら急な此場の手詰。救ふてやるのも素手では（14ウ）ならぬ。其質物にはたつた今。ノソレこな様の懐へ。ア、コレ驚く事はない〳〵。何ニも角も合点しや。ガサ其質物預ろかい」。「ホイ成ル程すりや今のを。ア、是非がない。そんなら当分ン此一ト品」。「ヲツト受取ッた。ソレ五十両」。「ヱ、忝い。サア金ネ戻す受ケ取レ。うぬ云イ分ンの有ル（15オ）やつなれど。赦してこます。とつとゝうせふ」と蹴飛され。地ハル尻をフシかゝへて逃帰る。地ハル五町は跡を色見送ッつて。「詞コレハマアどなたか存ンじませぬが。手詰の場所を忝ふござります」。「ハテ札よりは此宸筆。三百両の相場なれば。金ネにしたらば二タつ山じや（15ウ）が合点か。ソレ人の見ぬ中チ此死骸を」「ヲ、合点」と引ッかたげ。フシ藪中カさして急ぎ行。地ハル跡に観九は色したり顔。「詞へ、ほんにマアけふの様ッに絵の付ッ事はないわい。ハアこりやまんが直つて来たぞ。ドレマア三百両の直打の（16オ）代呂物。ちよと拝見」と封おし切。「ヤア〳〵〳〵コリヤ何ンじや。コリヤコレ富の札じや。しかも跡月の売札。ヱ、けたいなこりややりくさつたな。儕レ遠くは行キおるまい」と。地ハル跡をしたふフシて追ッて行。

「地色ウ仕すましたり」と立チ出る五町。ハル付キ添金ネかし（16ウ）以前ンの色飛脚。「詞五町様首尾は」。「シイ。声が高カい。生牛の目もくり抜観九め。一ッぱいくはしてよい気味〳〵」。「何ンと五町様。飛脚の仕打しめ殺さるゝ身あんばい」。「イヤ又私シが金ネかしのせりふよかろがな」。「だまれ。いづれも物事をしづ（17オ）かに云ハしやれ。我レ等が仕事はコレ此通リ」。「ヤこりや本ン堂に有ッた祠堂金」。「サアさつきにちやくと百両包。法事の間にすりかへたじやて。何ンときよといか。ヤ彼レ是いふ中チ観九郎め。又引ッかへしてきおろも知レぬ。跡は我レ等に任カして早ふ」。「そんなら晩程サア（17ウ）おじや」と。フシ皆打チ連レて立チ帰る。

地色ウ跡に閣然かう〳〵と胸積りする鼻先キへ。フシハルうろ〳〵きよろ〳〵中観九郎。ハル坊主にばつたり色行キ当タり。「詞アイタ、、、、〳〵〳〵ヱ、誰レじやいの。ヲ、坊ン様ンゆるさんせ。おりやもふ金ネをかたられていま〳〵しうて目も見へぬ。どつ（18オ）ちへうせた」とかけ出す袂。「ヲツト待ッたり其金ネの有ル所いふて聞カそか」。「ヤア〳〵其金ネとはどれ〳〵どこに」。「サアさればとよ。最前貴様を衒たやつらが。右キから左リへ金をかはすと。アレアレ〳〵〳〵門ンに釣て有ル金灯籠の其（18ウ）中へ。ぽゝらのぽいとほり上ケたを。コレ此鼻が見付ケて置イたじやて」。「ムウそんなら金ネはあの中カへ」。「おつと待ッたり待チ給へ。其形でアノ灯籠。上ケたりおろしたりするを見付ケられてはやかましい。おれがして進ッぜたけれど。折（19オ）ふし疝気で腰がいたい。コレ〳〵此衣や頭巾を借ふ程に是を着て寺中の坊主が火を灯す体を見せ。誰レもこぬ中チサア早ふ」。「ヲツト合点。

イヤモ段ゝ々お世話。地ウ〳〵」とハル伯蔵主に。ウあらぬこつてう真黒な。ウ閣然に狐に中ウつま中ゝ（19ウ）れて。ハルウ羽織脱捨テ。ユリウ衣と頭巾。かぶる難ゝ義と中露程も合。ハルしらぬうつそり灯籠の合。ウ綱に手をかけする〳〵〳〵フシカ、リおろす所へ中寺中より。ハル出合イ頭に色男共。「詞そりや灯籠を盗する。さつきに祠堂の金ヲ取ッたも。扨は儕に極つた」と。地ハルたかりか、つて（20オ）中大勢が。ウ踏やら踏るやらめつたくた。ウたはいやくたい観九郎。「こりやどふする」を云ハさばこそ。ハル枴にぐる中〳〵棒しばり。「サアうせおらふ」と擲き立テ。ハル無理に引ぎする寺内の方。「アレヱ〳〵」中の泣キ声を。ハル跡に聞キ捨テ閣然は。逸足出してぞユリ三重へ上逃帰る（20ウ）

写本「碁太平記白石噺」より「第六　浅草の段」

第六　浅草の段

ハル兎角世界は儒仏神ウ尊き三つの中其中に。ウ栄ふる筈か罪咎もハル浅草寺のウ御宝前。ウ並ぶ方なき繁昌とフシ参り下向の其中ヵに。地色人付合も吉原で大福屋の惣六。ウ同じく跡に色牽頭の五町。「詞モシ角町の親方。私はちよつと寄ル所がござります。おまへは直にお帰りなされますか」。「イヤ江戸へ行所も有ど。待合す人も有ばちよつと堺屋へ寄ッていこ」。「ハイ〳〵夫レなら後（63オ）程〳〵」と。地ウ五町はノルかしこへ惣六は茶屋の奥へぞ入跡へ。ハルフシにた山通二三人。ハル茶屋の床几に色腰打かけ。「詞何と善公。日外からめつたむせうに繁昌する此浅草。観音様の御利生で此辺はよい金もふけじやないかいの」。「ヲ、ヤ其金もふけの次手に。奥州石堂殿とやらの預りの。後醍天皇様の御宸筆とやらを。持て居る者が有て差上たら。褒美は金子三百両下さると。お代官様からの云付。何でもこいつをほり出したら（63ウ）大キな仕合。何とマアそんな覚へはないかいの」。「ヲ、ソリヤ隣のがらくた店に。古い櫃ならたんと有レと。しんひつは一つも。ハルフシない」袖ふるひハル茶の銭も。ウかるい身にしも志小ヲクリおもき。中願ひを観世音はこぶ歩行も山川の合。詠歌深き咎今より後はよも有らじナヲス。「詞コレ申シ。問たい事がござり申。吉原で名の高い女郎サア。何ンと云申ぞ知ッてゐさるなら教へてくんさい」。「ヤア何じや。名の高い女郎いふてはしれぬが。夫レはどこの名は何と」。「ア、コナ人はいの。名を知申せば（64オ）夫へ行申。私が姉サアてこさるチヤウ。夫聞べいと思つて。商人やで聞ば髪結所へ行と云し。其髪結所で聞ばそりや通に聞レといひ申。マア其通殿から聞べいと思ひ付申シた」。「ム、其通とはマアおいらだが。ア誰で有ふな。ハテマア丁子屋で丁山か。ひな鶴か。松葉で松の井か扇屋で花扇か。中近で半夫か。イヤ〳〵今では鳶屋の人町かしほ絹か。かふ云て聞せても。長崎屋へ阿蘭陀を見物に行た様な物で一つもわからぬ。ハテ気の毒な尋物。ア、是。どふぞよい手が、り求めていきや。地ハルヱ、不便や」と夕問ぐれ。ウ鐘は（64ウ）上野か浅草を。フシわさくさいふて立帰る。地色ウ始終後に窺ふて。ウ人の難義尻くらひ観九郎といふ中悪ぜげん。ウ鶯くまたかも及なき欲に心の深爪を。ウ猫撫声に色傍へ寄。「詞コリヤわりや姉を尋る者そふなが。其姉に逢せてやろ」。「ヤアそんならお前が姉サアを。知て逢せてくれめすかチヤ」。「ヲ、逢せてやるはやるが。

コリヤ其我が尋る吉原といふ所へ。奉公をせにやならぬぞよ」。「サア姉サアに合してくれめしや」。「サそこじやて。其奉公するにはおれを伯父じやと云ねば。奉公にも置ず又姉にも逢れぬ。おれを伯（65オ）父しやといへよ。ヨヲ、合点か〳〵。サア〳〵そんならおれが連て行」と。地ウ出行こなた。「詞アイヤコレ観九郎待た」。「ムヽ。おれを呼だは。ヲヽ角町の親方。何ぞ用でもごんすか」。「イヤ外の事ではない。ガ悪ひ事するなやい。高の知レた代呂物。笠の台の飛ぬ先キとつとゝよしに仕たかよいぞよ」。「イヤコレ親方。そんないやみは云はるないのふ。此娘はおれが姪他人のかまふ事じやない。ナア姪よ。コリヤ伯父じやぞ〳〵」。「アイ伯父サアの世話となり申て奉公に行申ス」と。地ハル訳もぐはんぜも泣顔は。姉に逢たい計に（65ウ）ウ公界の渕にウ望むかと。ハル思へばいとゞ惣六も。ウ不便さ余り色傍へ寄。「ヤコレ観九郎。何かといふも面倒しい。此奉公人おれが買ふ。サおれに売てくれ」。「ヲヽ何国へなと売代呂物。直段次第でやりませふ」。「ムヽ。そんなら年も一はいに五十両。但不足なか。よもや不足は有まい。ガ是で物云ィ有ならば。おれも正体きつと糺す」「アヽコレ〳〵〳〵親方気の短ひ。ヱヽ〳〵夫では元直がはづれるけれど。アヽしよ事がない」と地ウ矢立取出し証文を。ハル認る中「詞コレ伯父サア。あの人に奉公すりや。姉サアに逢れ申か」。「ヲヽよい〳〵。委細はおれか呑（66オ）込だ」と。地ハル証文受取惣六はフシおのふ引連立帰る。地金戴てぞく〳〵と。ハル悦ぶ折から来かゝる中五町。ハル観九はこかげへ向ふより。ハル飛脚と見へてばち鬢頭ウ行当つて。「詞コレ〳〵物問ふ。ヱヽ浅草の浪人者はどこた」。「ハテめつそふな浅草の浪人者とはつまらぬ問ィやふ。シテ其浪人者に何の用で」。「イヤサ其御用といふは此状箱。急に渡さねばならぬ物。此中には忝も後醍醐天皇様の御宸筆。ゑらい金に成代呂物」。「ナニ其中な物が金に成か」。「ヲヽサ〳〵」。「ムヽどれちよつと見せさつしやれ」。「アヽイヤ〳〵夫からこらふじ。是はコレ大事の（66ウ）物。中ヵ々町人風情の見る物でない」と。地ウふりもぎるのを引ッたくり。「ハル是は」と立寄首筋色掴み。ウぐつと一ト しめフシしつてん八倒。

地ウ口に手を当死骸片寄状箱を。ウ懐中する間も傍の気遣ひハルフシ闘がしそふに来る男。「詞ヤアこなた爰に居るか。我は〳〵〳〵ナア。先月切に貸た金。元利共に五十両。けふの明日のと嘘をつき。よふすつぽりとはめたなア。サア今よこすかサアどふじや。ムヽ返事のないはよこさぬ気じやな。どふでたゞては返すまい。お代官所へ連て行。地ウサア〳〵（67オ）あゆめ」と引立る。「地ウマア〳〵待て」と詫るをも。ハル聞ぬ半へ色観九郎。「詞其金おれが貸てしんぜう」。「ムヽ終に見た事もない人が。金を貸ふとおつしやるは」。「サア何やら急な此場の手詰そこが相談。知らぬ人に只はかさぬ。何ぞ質物がヲス見たい」。「アヽイヤ質物が有程ならば此難義は」。「ハアテ扨。其質物はたつた今。こな様の懐へ。アイヤコレ〳〵驚く事はない。彼ナ。今の代呂物預りやしよかい」。「ホイ夫レなれば先当分は貴様に是を」。「ヲヽしつかりと預つた。ソレ五十両遣はんせ」。「ヱヽ忝い。サア金戻す（67ウ）ソレ受取レ。うぬ云分有やつなれと赦してくれる。長居せば張のめす」と。地ハル立蹴にはつたと蹴倒せばフシ尻をかゝへて逃帰る。地色五町は跡を色見送りて。「詞どなたかは存ませぬが。お心入レ忝い。ガ念の為中ヵを改て」。「ハテよいわいの。褒美の金は山割。人殺しを云はぬといふ証拠はこつちも同類」。「ムヽ夫レならば其時迄。シテ此

死骸は」。「ハテ奥山の片隅へ人のしらぬを幸ィに」。「地ハル合点〳〵」と引かたげ。ウしげみをフシさして急ぎ行。

ハル観九郎は色したり顔。「詞コリヤけふの様に画が付事はないわい。一寸（68オ）くると田舎娘五十両のたゞ取。又宸筆の堀出し。さつきにちらと聞て居た。是を持て行ば三百両の褒美。コリヤ無尽場で貰ふた百。さらちよぼで十貫に成た様な物じゃ。よい事は二つないといへど。斯よい事のつゞくと云フは。わしが運の強いのか。ムヽハア〳〵ムヽフウ〳〵〳〵〳〵。したが其宸筆とやら。どんな物じや見た事がない。次手に拝モ」と封押切。地ウ明れば中にはハル富の札。「詞しかも一昨日突たのじや。ヤア〳〵扨は。アイヤまだ折紙が添て有。是が彼宸筆とやら（68ウ）か」と。地うや〳〵敷色押開き。「詞ヱヽ何々たばかり申一札の事。ヤア〳〵〳〵コリヤ一つも合点が行ぬ。質入証文。売買証文。誤り一札抔（など）は有（ママ）中（リ）チ。たばかり一札と云事。古へいかみの権太を始今此方に至る迄。終に仕た事も聞た事もない。がまづ文段を見た上で」と。地又うや〳〵敷色押開き。「詞ヱヽ何々たばかり申一ッ札の事。一つ其方義。強俗（ママ）非道かぎりなく。今日も田舎娘をかとはかし。五十（69オ）両の金たばかりし事慥に見届。此科代に最前の飛脚と云合せ。〆殺せし真似も借金乞も。皆拵の手事にて。右五十両の金子此方へせしめる物也。むだ骨の観九郎殿先刻の三人。ヤア〳〵〳〵〳〵。扨は皆々云合せ。かたり自慢の此観九郎を。深い所へやりおつたなア。地ハル遠くは行じ」と一ッさんに。ウ何国を当テか雲かすみ跡をしたふて三重へ上おふてゆく（69ウ）

（くぼり　ひろあき・大阪市立大学大学院文学研究科教授）